

■バニーエルザはショタの催眠肉便器 2日目

——依頼二日目。

少年は足音を聞いて自室で目を覚ます。今この家には少年とエルザのみ。つまり足音はエルザのものだ。

昨夜、少年の催眠によって肉便器と化したエルザ。彼女が朝一番の挨拶にでも来たのか……そう思い、開いたドアから出迎えた瞬間。訪れたのは媚びた言葉ではなく、強烈な激痛であった。

「……防御系の魔法か。二つ以上の魔法を所有しているところを見るに、やはりホルダー系だな？」

催眠にかかったはずのエルザだが……なんと一晩の睡眠で回復したようだ。

あえて反抗させるのも陵辱調教の醍醐味として、反抗できる余地は残していた……とはいえ、ここまで強く反抗してくるのは計算外であった。念のために自動防御が発動する魔法道具を装備していたので軽傷で済んだが、それでもかなりの痛みが頬に突き刺さっている。

しかもホルダー系……道具によって魔法を使用していることが知られてしまった。流石はS級魔導師といったところだろう。

エルザは催眠を破り、種もバレたことで早くも勝利を確信している。

「このことは評議員に報告する。少年だろうと容赦はせん……催眠魔法を悪用した罪、大人しく償うがいい！」

——パンッ！

「……………」

万事休すかと思われたが——試しに手拍子をした瞬間、エルザの動きが完全に停止する。

幸いにも、最初に仕込み、最も使用したこの暗示だけはまだ残っていたようだ。

【流石はエルザさん……まさか一晩で回復するとは思わなかったよ。まあ『自動防御』あるから負けはしないけど……催眠レベル上げとか？】

エルザも少年相手に、本気では攻撃しないはず。となれば少年に対してできることは殴っただけだが、これなら『自動防御』で防げる。

とはいえ、念を入れるに越したことはない。少年は催眠レベルを上げ、もう二度と手を上げたりできないように催眠をかけ直す。

昨日と同じ催眠をかけ、彼女をバニー姿に戻す。そして更に追加の暗示を足す。

【『催眠魔法が解けたままと思い込む』……と】

——パンッ！

再び手を叩き、エルザの意識を戻す。

◆

(……っ？！ 私は何を……そうだ！ こいつにかけられた術式を解いたのだ！ 今すぐ通報して、こいつを……)

少年を殴った直後のエルザ。なぜか不自然に今の状況を確認し直すが、やることは変わらない。卑劣な少年を通報しようと思ったが……

【い、痛いなぁエルザさん。てっきり朝の挨拶に来たのかと……】

弱々しくなった少年。術式が解けたことで腑抜けになったのだろうか。そんな様子を見て、エルザも躊躇してしまう。

「……ふん、今更媚びても無駄だ。もう私にかかった術式は解けたのだからな。証拠が見つかり次第、評議員送りにしてやる……覚悟しておけ！」

(そうだ、証拠がなければ意味がない。術式の痕跡を見つけなければ……)

少年は『催眠』だと言っていたが、催眠などこの世に存在しない。となれば、自身が昨日かけられたのは術式魔法しか有り得ない。

エルザは証拠不十分なこの状況を打開するため、証拠——術式の痕跡を探す。少年に媚を売ってでも探し出す。

そうやって理由付け、術式の痕跡を探しつつメイドとしての仕事を続けていく……

——……

—————……………

【エルザさん、喉が渇いたー。お茶淹れてー。ていうか一緒に飲もう♪】

「……淹れたぞ。これでいいか？」

【え、早っ？！】

少年から注文され、即座に茶を二つ淹れたエルザ。

油断させるためバニー姿のまま少年の部屋に入り、愛嬌を見せて茶を提供しつつ、少年の部屋に術式の痕跡がないか見ていく。

(……どこだ？ これだけ強力な術式となれば、どこかに証拠はあるはず……)

【あー美味しー。エルザさんも飲めば？】

「あ、ああ」

あまり怪しまれ、また術式を発動されては元も子もない。催促され、自分で淹れたので何の心配もないはずの茶を一口含み、飲み干し——

——パンッ！

【でもそのお茶、女性用の媚薬入りだよ？ しかも超強力で即効性のある最悪なヤツね】

「っっ？！」

少年が手を叩いて言った瞬間、思わず身をすくめて喉を抑える。

「お、お前っ！ 変な冗談を……………うっ♥」

つい反応してしまったが、既に術式は解けたはず。もうこのような戯言は通じない。……はずだった。
だが少年に言われた途端、なぜか何も入ってはいないはずの紅茶を飲んだことでエルザの身体は熱く反応してしまう。

(ば、バカなっ！ 術式は解いたはず……まさか再始動したのか？ いや、では……本当に媚薬が……？)

酷く興奮した肉体。少年によって何かされたのは間違いない。
だが自分には催眠が効かなければ、かかっていた術式も解けたはず。そして術式の再始動には相当な時間を要するはず。
となれば少年の言う通り、いつの間にか超強力な媚薬が含まれていたのだろう。
超高速で物体を運ぶか、はたまた強制的に発情させる魔法でもあるというのか。
まるで催眠術にでもかかったような事態に、エルザは混乱するしかない。

【大丈夫？ ただの冗談だったんだけど……本当に興奮しちゃってる？ 顔赤いよ、ここのベッドで寝たら？】

「お、お前の冗談に驚いただけだ。では、まだ掃除が残っているのでは……し、失礼する……っっ♥」

(誰がお前の部屋のベッドなど使うか！ そんなことをすれば……また、昨日のように……♥)

昨夜の陵辱——十回以上にも及ぶ種漬けアクメ調教——を思い出し、更に肉体の反応が加速。

己の肉欲を認められず、適当な理由で戯言をあしらうと部屋を出る。

(くっ……何なのだこれはっ！ 一刻も早く、証拠を見つけなければ……っ♥)

陵辱の際に描き込まれた淫紋——ハートマークや十画以上もの『正』の字——が描かれた下腹部と内股を震わせ、
証拠探しのために掃除を再開する……

——……

—————……………

(くそっ、何も見つからん！ このままでは……身体が、火照っていくだけではないか……っ♥)

証拠探しは不調。手がかりすら掴めず、ただ時間を浪費し、その分だけ身体を発情させただけであった。

【エルザさーん？ そろそろ勉強みてほしいんだけどー？】

そうする間に少年が勉強する時間になり、仕方無く部屋で教えることになる。
本来ならば少年に近づきたくないが、最も証拠がありそうなのが少年の部屋だ。
パニースーツのまま少年の隣に座り、学業を教えつつ改めて部屋を眺めていく。

【……エルザさーん？】

ずぶっ♥

「んひいっ♥ な、何をするっ?!」

証拠探しに気を取られ過ぎたか、少年によって制裁が下される。

胸にペンのキャップ部が突き刺され、媚薬で敏感になっているエルザは不意打ちを受けて反射的に喘いでしまう。

【授業中なんだからよ見されると困るんだけどなあ〜？】

「だからといって、いちいちそんなことをせずともいいだろう！」

【いやいや、肉便器はこれくらいの扱いでいいと思うけど？ ていうかエルザさん、今のでも感じてなかった？】

「……そんなことがあるはずなからう」

(媚薬と術式さえなければ、誰があんな風に喘ぐものか……！)

【でもなあ……そうだ、感じてるか分かりやすくするために、気持ち良くなったら蟹股になってよ】

「……頼めばそうすると思ったか？ そもそも、私はそんなもので感じたりは……」

—— パンッ！

【『気持ち良くなったら蟹股』 だからね〜♪】

また少年が手を叩きながら都合のいいことを押し付ける。

(……勝手に言っているがいい。こんな奴の相手をするより、早く術式の証拠を……)

【ところでエルザさん、ここなんですけど】

ぶにっ♥

「ひいんっ♥」

また虚を突いて少年がエルザの爆乳をキャップ部でつつく。

飲まれた媚薬で感度が上がったエルザの胸に、鋭い快楽の波が身体に奔り……同時に、座ったまま両脚が勝手に大きく開かれる。

【あれ、ちゃんと蟹股っぽくなってる……やっぱ気持ち良かったんだね！】

「違うと言っている！ 今のは、少しむず痒かっただけだっ！」

すぐに脚を閉じて否定。確かに強い快楽を感じてしまったが、それを知られるのとそうでないのとでは恥辱の度合いがまるで違う。

(またこいつの言葉通りに……！ 言われた通りに従ってしまう魔法が使われているのか？)

しかし、そんな催眠術のようなもの、存在するはずは……)

【エルザさん、次は——】

「今度は何だっ！」

ずぶんっ♥

「おひいいっ♡」

苛立つて振り向き——その拍子に、偶然にもまたペんが突き刺さる。

振り向いた反動で爆乳は大きく揺れており、先程よりも勢いよく刺さってしまい、エルザは嬌声と共に蟹股になる。

【え、今エルザさんからおっぱいぶつけてきたよね？ また蟹股になって……あ、誘ってるの？】

「ち、違うっ♡ 今のは、たまたま……」

がしっ♡

「んおっ♡」

【溜まってるならそう言ってくれればいいのに。我慢は身体によくないよ？】

隙だらけになり、少年がすかさず詰め寄って胸と尻を力強く掴んでくる。

やはり謎の力によって脚は閉じようとしても全く動かず、蟹股のまま体勢を変えられない。

教鞭を奪った少年により、逆教育と言う名の陵辱を受けることになる。

【勉強をともに教えてくれないどころか、自分から誘ってくる淫乱女教師にはお仕置きしないとねー♪】

「やめろっ♡ 私に触れるなっ♡」

【注意する声が既に牝ってるし♪ ほら、先生、起立！】

—— パンッ！ と少年が手を叩いて急かすと、身体が勝手に立ち上がる。もちろん脚は蟹股のままで、本格的に無様な立ち姿だ。

(くっ……こんな奴の前で、こんな格好をさせられるなど……)

【えらい反抗的な眼だなあ……職務怠慢したのエルザさんだって分かってる？】

パシィンッ♡

「つくうっ！ 黙れ……」

【ん？ もしかして叩かれるのにも感じて……】

「有り得んっ！」

教鞭で尻を叩かれる。下手をすればこれにも性的興奮を感じてしまいそうになるが、僅かに痛みが勝った。

証拠を見つけるまで反撃はできずとも、せめて無様な蟹股だけは閉じようとするが——

—— パンッ！

【『痛みが快感に変換される』】

パシィンッ♡

「んおおおっ♡」

同じ刺激をもたらすはずのスパンキング。だが少年が呟いた直後、その刺激からは痛みが薄れ、逆に僅かな快感が爆的に増加。

性的快感を得てしまい、また閉じかけた脚がガバリと開かれる。

【ほら、気持ち良くなってる】

「違うっ♡ お前がっ……おかしな魔法をかけてっ♡」

【あ、催眠にかかっているって認めるんだ？】

パンッ♡ パシィンッ♡ パンッ♡ パァァンッ♡

「誰がっ♡ そんなものっ♡ 私はっ♡ 催眠になどっ♡ かかっているいいいっ♡」

叩かれるたびに大きな尻肉がぶるんっ と震える。

脚を閉じようとしては気持ち良くなって蟹股になるため膝がカクカクと震え、余計に尻の揺れを強調させる。

【へえ……催眠にかかっているなら好き勝手言っているよね？】

「すっ♡ 好きにしるっ♡」

(催眠など存在せんっ♡ こいつが何を言おうと、決して……)

—— パンッ！

【『感度 五倍』】

パシィンッ♡

「おっ♡♡ ほおおおっ♡♡」

有り得ないことに少年の言葉に従ってエルザの感度が急激に上昇、一度の尻叩きで軽い絶頂に近い快感を得てしまう。

強烈な快感で脚を閉じようとさえできず、蟹股の震えが停止。完全な蟹股となり、尻と股間が無防備なまま少年の前に晒される。

「ひっ♡ ひいいっ♡」

(何だ今の快楽はっ♡ 本当に、感度が五倍になったとでも言うのかっ♡)

【どう？ 催眠かかった？】

「お前っ♡ また変な魔法を……」

パンッ♡

「んおおおっ♡♡」

【一応今のエルザさんは教師なんだから、せめてどうなってるかくらい教えてくれないかなー】

ピタリと尻肉に教鞭を押し当て、グリグリと感触を確かめてくる。

それだけでも丹念に愛撫された以上の甘い熱を帯びてしまうが、無論、口には出さない。

(なぜ、こんなに気持ち良く……♡ いや、気持ち良くなどないっ♡ だが、蟹股は閉じなければ……こいつを勘違いさせてしまう……っ♡)

【どうなの？ 恥ずかしくて気持ち良いなんて言えない？】

「き……♥ 気持ち悪い、ただだ……♥」

パンッ♥

「あへえっ♥♥」

尻肉を打たれ、はしたないアへ声を漏らす。既に秘所は濡れきっており、太股には半透明な液体が垂れ流れている。

【まだ職務怠慢するのかー。しょうがない、とっておきのお仕置きするしかないかー♪】

背後からの声に含まれる悪意が更に強くなった。一体何をされるのか、恐怖とも期待とも知れぬ感覚に包まれ――

「好きにしと言ったろう♥ 私は、この程度の折檻になど屈さな……」

パチィンッ♥

「イっっひいいいいいいっ♥♥」

不安を掃おうと反論したエルザの股間に、真下から鞭が叩きこまれる。

快楽に蕩けた頭では予測できなかった場所……会陰と陰唇を打たれ、エルザは僅かではあるが蟹股のまま腰を前後させてしまう。

【ほら、ここもだよっ！】

ピンッ♥

「んほっ♥♥ く、クリいいっ♥♥」

陰唇・会陰の次は陰核。最も感覚が鋭敏な箇所が強かに弾かれ、思わず淫語で啼かされる。

特にここは強い痛みがあるはずなのに、ほぼ完全に快感となってエルザの思考を桃色に染め上げる。

この刺激は充分トドメに相応しく、エルザは既に限界に達していたが……

少年は容赦なく追い打ちをかけ、絶頂の瞬間まで尻、股間、陰核を連打する。

(い、イクッ♥♥ こんな辱めに♥♥ イカされ……)

体験版はここまでです。続きは製品版で！